

東京バッハ合唱団 月報

[第561号] 2009年3月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.561
March 2009

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

宮田光雄著『ホロコースト 以後 を生きる』を読む

宗教間対話と政治的紛争のはざままで

大村 恵美子

宮田光雄先生

思いがけない御惠贈のこのご本が、発行日の2009年1月29日に届きました(岩波書店刊)。これこそが、とくに最近のイスラエルのガザ侵攻以来、私が朝ごとに渴望しつづけていたものだったので、びっくりし、心より感謝いたしました。

じつは、これまで、宮田先生の数々のご本を読ませていただいても、どうしてもキリスト教側の護教的な傾向が感じられて、たいへん失礼ながら、先生だけでも、もっと公平な発言を示していただけられないものかと、勝手にじれったがっているところがありました。学者でない私には、たくさん本を読んで分別の多い賢者たちは、あまりに学問的に公平であろうとして、かえってご自分自身の主張が弱くなるのではないか、という、昔からの懸念に悩まされていたのです。

ところが、手にした途端に読みはじめたこの御新著は、まさにショックで、初めて私は先生の本音に接したような喜びに満たされました。ほんとうにありがとうございました。

以下に、御著書からの引用をお許しいただきたいと存じます。(p.222-224)

有名なストラスブールの大聖堂南側入り口には、《エクレシア》と《シナゴーク》という彫像が向かいあう形で立っています。こうした組み合わせは、ヨーロッパのあちこちの教会で、たとえばバンベルク大聖堂の彫像やマールブルクのエリーザベト教会のステンドグラスなどにみられるものです。それらは、教会の勝利とユダヤ教にたいする軽蔑とを形象化した表現です。

代表的なストラスブールの《エクレシア》像は、頭上に王冠を頂き、華やかな衣服をまとい、右手には十字杖と勝利の旗印、その左手には杯を持っています。優越した眼差しを《シナゴーク》像の方に向け、その口もと、こころもち開かれて語りかけようとしているかのようです。後代につけ加えられた記銘の文字には、この「キリストの血〔=杯の中の血〕によって私は汝に打ち勝つ」と記されていました。



これに反して《シナゴーク》像の方は、粗末な衣服を身にまとい、右手には折れた槍を持ち、だらんと垂れた左手には破れたトーラー〔ユダヤ教の律法〕の破片を持っています。《シナゴーク》像の目は布で縛られてみえなくされ、うな垂れて立っています。王冠は、すでにその頭上からすべり落ちています。それに加えられた記銘には「同じ血が私の目をみえなくし

た」と記されていたのでした。

これら二つの彫像のあいだに立った柱の上には、有名な名君ソロモンが判決を言い渡すため剣を抱いて君臨しています。さらに彼の頭上には、左手に地球儀をささげて祝福のために右手を伸ばす世界の裁き主キリストの像が示されています(G・デヒーオ『シュトラースブルク・ミュンスター』1922年)。

こうした伝統的なキリスト教的救済論の教義にたいしては、何世紀にもわたって変わることなく、ユダヤ教から異論が投げかけられてきました。そのもっとも重大な異論は、「イエスはメシアではない、なぜなら、この世は根本的に何ら変えられていないし、メシア的な救いの跡など少しも感じとられないから」というものでした。しかし、ホロコースト以後、まったく、質的に新しい別の問いが投げかけられることになりました。すなわ



写真:ストラスブール大聖堂の「エクレシア」(上)と「シナゴーク」(下)(2008.8.28 大村撮影)

ち、「イエスが到来しなかった方が、いっそうよかったのではないか」(アーヴィング・グリーンバーグ「煙の雲、火の柱 ホロコースト以後のユダヤ教・キリスト教・近代性」、E・フライシュナー『アウシュヴィッツ 新時代の始まりか』1977年、所収)。

これこそ、ホロコースト以後におけるもっとも根本的なキリスト論への問い、すなわち、イエス・キリストは世界の救い主であるという信仰告白についての重大な懐疑と言ってよいものです。ここでは、イエスの到来は、メシア的救済どころか、その反対に、ユダヤ人の差別と迫害とを引き起こし、近代の反ユダヤ主義に道を開いたのではないのかというわけです。

疑いもなく、教会史においては特定のキリスト論、すなわち、特定のイエス・キリスト理解がユダヤ人にたいする蔑視や憎悪、ひいては敵意を生み出し、その《宗教的上部構造》(G・W・ギンツェル)を形づくってきたのでした。ホロコーストはキリスト論の代価ではなかったのか。ヴィーゼル^(*)があるインタビューで述べた、いっそうラディカルな表現を用いれば、アウシュヴィッツのガスかまどで灰となって消えていったのは、イエス・キリストにたいする信仰ではなかったか、を問われているのです。「アウシュヴィッツで死んでいったのはユダヤの民ではなくキリスト教だったのではないのか」。

いかなる意味で、この発言は真実と言えるのでしょうか。それは、あまりにも厳しすぎる響きをもっていないでしょうか。しかし、ヴィーゼルの言おうとするのは、直接法的断定というよりも、むしろ、一つの命令法ではないでしょうか。教会は何ら留保するところなく自己自身の歴史を直視すべきである、と。いかにしてアウシュヴィッツにいたる教会史が歩まれてきたのか。それを徹底的にみつめ直し、学び直すことから、これまでとは別のキリスト教の将来の歩みが踏み出されるのではないのか、という問いかけです。

ご存知のとおり、私たちは8月に第5回ヨーロッパ演奏旅行に出かけ、ストラズブルにも1泊します。1983年の第1回旅行では、この地の改革教会でコンサートをさせていただけたのですが、その代わりに大聖堂を見る時間がなく、素通りせざるをえなかったのです。

この「エクレシア」と「シナゴグ」の像は、私の留学時代から今にいたるまで、ずっと心の奥にわだかまっており、<欧米>伝来のキリスト教に、私はずっと批判的な立場になっていたのです。今回の旅で、まずストラズブルでこの像を、みんなで一緒にじっくりと見直し、こんなに長い歴史の中を、この像がずっと存続してきたいぶかしさに、何らかの意見をまとめたい、この思いが、私としてはかなり重大な旅のモチベーションとなっていたのでした。

それが、いただいた御著書で、ピタリと焦点に達しました。最近のイスラエルのガザ侵攻にも、世界が遠巻き

に騒ぐばかりで、パレスティナ人のカタストロフには指ひとつ触れない、この卑怯さを自分も共有する苦しさ、やっといくぶんかの光が加わったような気がします。

ご紹介といえるようなものでもなく、私の感銘を受けた箇所を勝手にピックアップさせていただいて、8月の旅行前に、団員の方々がぜひこのご本に接して、心してヨーロッパに旅だってほしいとの願いをこめて、先生への御礼とさせていただきます。

目次

はじめに ホロコーストとは何か

ホロコーストを越えて (p.3~)

聖書物語再読 影響史の視点から (p.71~)

ホロコーストの問いかけるもの (p.191~266)

・聖書が広い読者をもつにつれて、キリスト教的なファリサイ派像が刻印されていくことになります。ヨーロッパ各国語で《ファリサイ的》=《偽善的》という慣用語法が一般化するにいたります。こうしたファリサイ派の姿が現代ユダヤ教の《父祖》として理解され、近代以降の市民的=キリスト教的反ユダヤ主義と結びつくことになったのです。(p.52)

・「その血の責任は、我々と子孫にある」と「民はごぞつて答えた」という表現は、マタイによる福音書にのみ出てくるものです。.....[マタイ]27章25節の言葉は「脚色された教義学である」ことは確実です。...ここから《神殺しの民》としてユダヤ人の全体責任=単独責任が神学的に正当化されてきたのは大きな過ちと言わなければなりません。(p.53-54)

・ヒトラーは.....こう語ったという。「福音書の中でユダヤ人は.....叫んでいる その血の責任はわれわれとわれわれの子孫にある と。余は、おそらく、この呪いを執行しなければならないだろう。(p.54)

・むしろ、新約聖書の正しい釈義のためにも、キリスト教神学は、旧約聖書のユダヤ教的釈義やその伝統的文献に学ぶことが必要でしょう。(p.56)

・地上の国にあって神の国のしるしを立てるとは、貧しい人びと、差別され、疎外されている人びとのために味方することを意味しています。.....キリスト教徒もユダヤ教徒も、この世において、ともに基本的人権を守り強めるための信仰的使命をあたえられています。この世において不法が顕在化し、人権侵害が生ずるかぎり、それがどこであれ、反対の声をあげることを求められているのです。(p.63)

・新約聖書では、《土地取得》にたいする神の約束も、そもそも《土地》(=国土)というテーマも、ほとんど見あたらないというのです。(p.64)

・こうしてイスラエルにたいする《土地》の約束は、もはや神学的な問題たりえないと結論される。(p.65)

・国連決議に即して、即時、全自治地域から、いな全

占領地から撤退して、主権をもつパレスチナ国家の独立を承認すること、それによって真の和解と平和を樹立することこそ、「預言者たちの預言の光の下に」建国されたはずの国家イスラエルのとるべき道ではないでしょうか。キリスト教徒もまた、とくに西欧のキリスト教徒は……むしろ、過去における誤った責任喪失の反省からこそ、このイスラエル国家の政治的・軍事的行動にたいして明確な批判の声をあげるべきではないでしょうか。それによって初めて、イスラエルにたいする《批判的連帯》の責任を正しく果たすものとなるのではないでしょうか。(p.67)

・アメリカは、もはや世界の平和を支える要因ではなく、むしろ不安定化の要因となっています。……こうした中で注目されるのは、アメリカの中東政策、とくにイスラエル国家にたいする一面的加担の姿勢です。……いまでは、むしろ、パレスチナにおけるイスラエルの行動を是認することにおいて、いわば悪への選好を示しているのではないのでしょうか。それは、アメリカがみずからの行動について抱く深層心理におけるやましさを正当化してくれるようにみえるからだという、まことにうがった指摘さえなされているほどです。(p.175)

・現代において神による《約束の地》を文字通りに理解し、ダビデの版図に固執しているのがユダヤ教の右翼保守主義的立場にほかなりません。こうした入植地政策に反対するパレスチナ民衆のレジスタンスにたいして、イスラエル政府は、圧倒的な武力による《国家的テロ》をもって応えています。(p.176)

・イスラエルにおけるユダヤ人は、いな、全世界のユダヤ人は、パレスチナ民衆が解放されることなしには、解放されえないのではなからうか。パレスチナ人の問題がひとたび理解されたならば、もはや占領をこれ以上続けることはできない(エリス^(*))。(p.178)

・人類は、過去の、とくにアウシュヴィッツの犠牲者たちの筆舌に尽くしがたい叫びを記憶するときのみ、現在と将来とにたいして人間らしい顔をあたえることができるのです。(p.219)

・ホロコースト以後の教育は、あらゆる形の憎しみに抵抗すること、あらゆる形の暴力に抵抗すること、あらゆる差別や拷問、構造的な貧困や抑圧に抗議することを意味しています。ヴィーゼルの人権のための闘いは、こうした教育的・倫理的モチーフに貫かれるべきことを教えています。彼の作品は、キリスト教徒にも非キリスト教徒にも、この同じ闘いを闘うように勇気づけ励ますものです。なぜなら、それは、人間性にたいするもっとも危険な敵、すなわち、無関心にたいして目を向けるように訴えているのですから。(p.230)

・イスラム教は、キリスト教以後に生まれた《啓示》宗教として、そのことのゆえにキリスト教側からは懐疑的にみられがちでした。啓蒙主義の時代までは、ムハンマドを《偽りの預言者》とみなす主張が支配的でした。最近では、宗教間対話の流れの中で、こうしたムハンマド像は訂正されつつあります。(p.232)

・よく知られているイエスの山上の説教には、宗教間対話への促しに通ずる勧告があります。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。……自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか」(マタイ5:46-47)。(p.233)

・こうしてホロコーストは、イスラエル社会の集団的記憶の中では、何をさておいてもシオニズムとイスラエル建国に最終的な正当化をあたえる出来事として受容されることになりました。(p.240)

・イスラエル建国に際して、西欧諸国の多くは、これまでの反ユダヤ主義の歴史的罪責の自覚から、さらにまた迫害の中で示されたユダヤ人の信仰的敬虔への敬意から、1947年の国連決議によって、それを承認したのでした。(p.243)

・今日のイスラエル国家は、19世紀と20世紀の歴史から生まれた政治的必然性の所産なのです。この大なり小なり世俗的な国家が真剣に受けとられることを願うなら、国際法に即して生きること、国際法を基準にして評価されるように行動しなければならないでしょう。(p.252)

・エリスは……ホロコーストをふり返り、日夜ユダヤ人の子どもが焼かれていた事実が神を信じることが困難にしてきたことにふれて、こう言うのです。[ユダヤ人以外の]他の子どもたち　パレスチナやレバノンの子どもたちもふくめて　が焼かれているとき、今日、ユダヤ人にとって神への問いは何らの意味をもたないのではなからうか。しかも、われわれの手で、われわれの武器で、われわれの国家指導者たちの命令で、しかもアメリカに生きている榮譽を受けたユダヤ人に支持されて焼かれているときに？……焔の中から燃えている子どもたちを助け出すことなしには、神のイメージは、今日、偽りの神である。子どもを救うことなく神について語るのは、それゆえ偶像崇拜にほかならない。……われわれが自分たちの強力になることを喜んでいるとき、われわれは、われわれの行き過ぎによる罪過を悔いて、直ちにそれを中止しなければならない。(エリス)。(p.264-265)

*)ヴィーゼル = Elie Wiesel (1928年～)、ルーマニア出身のユダヤ人作家。少年時代にアウシュヴィッツに収容されたが生還し、戦後フランスでジャーナリストとなり、後アメリカに帰化。自らのホロコースト体験を自伝的に記し、1986年にノーベル平和賞を受賞。小説『夜』など多数が翻訳されている。

**)エリス = Marc H. Ellis (1952年～)。アメリカ在住のユダヤ教神学者。ラテン・アメリカの《解放の神学》から大きな刺激を受け、それと連帯しようとするものであることは明白。(p.177)

7. Ach wie flüchtig, ach wie nichtig (ああいかに果敢なき, ああいかに空しき) はかなく むなしき 地なるいのち

[歌詞・旋律]ミハエル・フランク Michael Franck 1652
[編曲]Johann Crüger 1661 [参考]EG 528, EKG 327

カンタータ第 26 番《はかなく むなしき 地なるいのち》

[同名] BWV 26 »Ach wie flüchtig, ach wie nichtig«

第 1 曲: コラール合唱 (旋律 S) ← 第 1 節

(第 2-5 曲 ← 中間詩節バラフレーズ)

第 6 曲: コラール (単純 4 声体) ← 第 13 節

第 1 節
はかなく むなしき
地なる いのち
靄(もや)と 立ちのぼり
また 消え去りゆく
そを とくと 悟れ

BWV 26/1

第 13 節
はかなく むなしき
人の 世 すべて
見る もの 過ぎ去る
主を 畏(おそ)るる 者
とどまらん とわに

BWV 26/6

Choral 7.

は かな く む な し き
Ach wie flü - tig, ach wie nich - tig

地 なる い の ち も や と た
ist der Men - schen Le - - ben! Wie ein Ne - bel

ち の ぼ り ま た き え さ り ゆ く
bald ent - ste - het und auch wie - der bald ver - ge - het,

そ を と く と さ と れ
so ist un - - ser Le - ben, se - het!

旋律: NBA Sl.B27.p58 日本語版: 教会カンタータ第 26 番《はかなく むなしき 地なるいのち》(東京バッハ合唱団)

南吉衛牧師との交流会

2009 年 3 月 16 日 (月) 目白聖公会、19:30

シュトゥットガルトにご就任中の南吉衛牧師が、3 月に一時帰国をされ、過密な日程の中、東京バッハ合唱団のために一夕をとってくださり、当地でのコンサートの趣旨などにつきお話を聞かさせていただきますことになりました。当日は荻窪教会の小海基牧師も出席されます(右欄参照)。どなたでもお出でいただければ幸いです。

18:30 合唱団通常練習

19:30 南牧師のお話

20:30 「揚子江」(中華料理、目白駅近く)に移動し、有志で会食。

2009 年 1 月 31 日現在

[ヨーロッパ演奏旅行募金] 1,194,000 円 (目標 300 万円)

[楽譜出版協力募金] 報告 6,618,000 円 (目標 1000 万円)

<予告>

J. S. バッハ 午後の教会音楽

第 19 回荻窪音楽祭参加

[日時] 5 月 17 日 (日) 15:00 開演 (16:30 終了)

[会場] 日本キリスト教団 荻窪教会

[演奏] ソプラノ独唱: 光野孝子

フルート: 若松純子

オルガン: 金澤亜希子

合唱: 東京バッハ合唱団

指揮: 大村恵美子

[主催] 「クラシック音楽を楽しむ街・荻窪」の会

日本キリスト教団 荻窪教会

入場無料 (ただし、席数に限りがあります)

カンタータ第 8 番《み神よ わが死はいつ》BWV8

1. 合唱 (合唱)

4. アリア (バス斉唱)

6. コラール (合唱)

「宗教歌曲集」より (ソプラノ独唱)

1. 《太陽は今や一日を終えて》BWV446 (第 1, 9 節)

2. 《愛するわが羊 いずこに迷いし》BWV507 (第 1, 7, 8, 9 節)

3. 《来たれ この日》BWV479 (第 1, 2 節)

カンタータ第 131 番《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》BWV131

1. 合唱

2. アリアとコラール (バス/ソプラノ斉唱)

3. 合唱

4. アリアとコラール (テノール/アルト斉唱)

5. 合唱

ミサ曲抜粋 (キリエ、グローリア、サンクトゥス)

1. キリエ BWV235/1 (4 部合唱)

2. グローリア BWV235/2 (4 部合唱)

3. サンクトゥス BWV232/22 (6 部合唱)

ご案内

この特別演奏会は、第 5 回ヨーロッパ演奏旅行 (今夏 8 月 7 日 ~ 16 日) における上演曲目の、仕上げと円熟を主なる目的としたものです。

現地では、BWV131 以外は原詞 (ミサ曲はラテン語、他はドイツ語) で演奏しますが、この日は、全曲日本語訳詞演奏で、新しい聴衆方にも、当合唱団の本来の方針をアピールしたいと思います。

合唱団後援会の皆様

度々お知らせしましたとおり、今年は例年通りの定期演奏会を割愛し、5 月は、この荻窪教会での演奏をもって代えさせていただきます。また、表題のごとく「荻窪音楽祭」の一環として催されるために、招待券・入場券の発行はございません。入場無料でご自由にお聴きいただけますが、100 席ほどの会堂ですので、なるべくお早めに (14:30 開場) ご来場くださいますようお願い申し上げます。

来月以降の月報にて、演奏会場 (= 荻窪教会) の地図を入れて、もういちど、ご案内を差しあげる予定です。